

俳句 大津俳句会

たわいなき話に夢中姫女苑ひめじょおん

井芹眞一郎

茅花流しつばなながそれぞれ昔語りあふ

井上 昭子

老鶯ろうおうの声をしきりに展望所

岩崎由美子

母の日や持もてざるほどに花の籠かご

大塚喜久子

母の日や供そなへる白きカーネーション

岡崎 浩子

夕焼や飛行機雲のすれちがふ

佐賀 久子

カルデラの風に太りし鯉こいのぼり幟

佐澤 俊子

俳句 つのはな句会

老いと言つ実感夏の土踏まづ

木庭 杏子

青時雨折り合いつけて明日を向く

上杉 波

蝌蚪かど群れるカタカナ言葉また増える

矢嶋 道子

山翡翠やませみはいずこ四十十川に雨

梅木トキエ

春の雨 土曜の午後の読書かな

塚本 洋子

麦秋のまん中ふいに来る狐愁

榮田しのぶ

道ばかりの村となりゆく春景色

村田 健二

多発する凡ミス クルル翻笑ばんう

志賀 孝子

著莪の花従順という言葉があつた

田上 公代

短歌 大津短歌会・野づかさ

風たちて桜花びら舞いくだる鳥の囀り微かに聞こゆ

小平 善行

何かしら心乱るる朝にして朝霜の野に驚はとび立つ

吉永 恵子

煙突の煙はなびき客を待つ昭和の長崎街の銭湯

坂本 杲子

広縁に猫の寝息の聞こえる冬の日ざしの暖かき部屋

鞍 岳志

昭和の歌流すテレビを我が夫は見ている指でテーブル叩き

山本 泰子

あどけなし黄色帽子の新学童麦穂畑に見え隠れする

吉田 良子

車窓には陽をあび光る春の海友の待つ駅近くなりけり

荒木 麗子

むらさきの花の咲きたるほとけのぞ空き地は春の真つ盛りなり

田中 玲子

今年また二人静の新芽いづ一坪ばかりの吾が庭おもて

菅野 静

雪つもり始めし輪島の地震あと何なす術も吾になれど

豊岡ミツル